

南阿蘇戦記

塚元秀樹

明治十年、新政府の地租改正による重税に苦しむ南阿蘇の貧農が、やむなく起こした百姓一揆。同時期に勃発した西南戦争で薩軍と政府軍の激戦に巻き込まれた南阿蘇の地で、凶らずも敵味方に分かれて対立を余儀なくされた人々は、如何に和解を模索したのだろうか。

長野一誠は久木野村（現南阿蘇村）河陰かいはんの自宅を出て、長野村へと向かっていた。

久木野村から東下田村の辺りまでは、水利に恵まれて水田が広がっている。山深い痩せた火山灰地にもかかわらず、金色に輝く稲穂がゆらゆらりと揺れさざめいている。

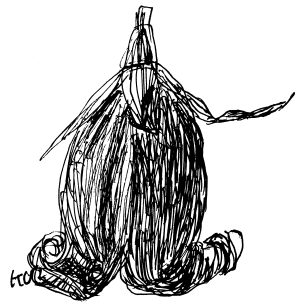
白川に架かる妙見橋を渡り川後田村かわごたに入ると突然景色が変わる。北にそびえる夜峰に向かって急な登り坂となり、

水田は姿を消す。川後田村を西に向かい喜多村に至っても同じような景色が続く。喜多村のはずれから北東へ向かう山道を半里ほど登れば、坂の途中に長野神社の大杉が見えてくる。そこが長野村である。どこを見渡しても水田は見当たらず、刈り取りの終わったトウモロコシの根っこや、枯れたサツマイモの蔓が地面に張り付く畑が寒々と広がるばかりで、この荒涼とした土地がいかに貧しいかを物語っている。

「こんな畑しかない貧しい川後田村、喜多村、長野村のこの貧しさが事の起りだった……」

長野一誠はブツブツとつぶやいた。

あれからもう十年、騒ぎはとうに収まったかのように南阿蘇の村々は静まり返っている。しかしそれは表向きの話



で、実際には人々の心に消えることのない傷跡として深く刻み込まれている。

長野一誠は心が重かった。

今から長野村に向かい、長野惟起の葬儀に参列しなければならぬ。南阿蘇きつての名士であった長野惟起の葬儀である。きつとあの騒動のときに長野一誠と対立した百姓たちが何百人と参列するであろう。その場に自分が参列するのはなんと気が重い仕事なのだが、明治十三年から熊本県議会議員を務めるほかに、十指に余る頭職の肩書をもつ自分が参列しないわけにはいかない。

そもそも逝去した長野惟起と自分は悪い関係ではなかったし、久木野村の土族である長野一誠と長野村の百姓である長野惟起とは、その姓が示すように遠く先祖をたどれば同じ一族である。ただ、親戚付き合いが全く無いことから分かるように、枝分かれしてからもうずいぶん長い年月が過ぎており、今では南阿蘇の地で同じ長野姓を有する間柄に過ぎない。

長野惟起は百姓として江戸期の終わりから明治二十年まで生き、八十九歳の天寿を全うしてあの世へ旅立っていった。

しかし、長野惟起は百姓仕事だけを生業として、生涯を過ごしたわけではない。百姓の傍ら、手習いの師匠として

長野村と白川村の二カ村に寺子屋を持ち、生涯千人を超える筆子すなわち教え子に読み書きを教え、教育者としての顔も併せ持っていた。

また、長野家は阿蘇大宮司家の家来五十四家の一つとして、苗字帯刀をゆるぎされた家柄であり、南阿蘇では知らぬ者のない名家であった。

その長野惟起も江戸期から幕末の混乱を経て新時代となった後、二十年余り生きて、大往生を遂げた。

長野一誠の周りから長野惟起のように江戸期の南阿蘇を知る者たちが櫛の歯を欠くように次々に抜け落ちていき、すでに五十を過ぎて初老となった長野一誠は、胸中を木枯らしが吹き抜けていくようなわびしさを感じずにはいられない。

長野一誠は、長野惟起の葬儀に遅参しないよう、馬に跨って葬儀の場である長野惟起の屋敷に向かっていた。馬の口取りは、いつものように作男の利助に任せている。

今頃は、長野家の新しい当主、立野村の中尾家から婿養子に來た貞嘉が喪主として大汗をかいていることだろう。

長野村に入り、馬上から眺めると、どの百姓家も茅で屋根が葺かれ、壁も茅で覆われている。屋内では土間の上に直接稲わらを敷き、猫伏ねだぶくとよばれる一間四方の稲わらの縄で編んだ敷物を乗せ、その上で寝起きしている。これでは、

骨まで凍るような阿蘇の冬を乗り切るのはさぞ難儀であろう。

縄文時代そのままの茅屋で日々を過ごす人々が少なからず存在している。この現実が一誠の心をますます重くする。

御一新からすでに二十年も過ぎ、東京や横浜では陸蒸気が走り、背広を着た日本人が牛鍋をついついていっているという華やかな文明開化の時代に、この村の寒々として寂しげな気配が一誠の胸を打つ。

そんな景色の中、馬に揺られて行くと、遠くに長野惟起の家が見えてきた。

貧しい長野村では唯一瓦葺きの屋根に、冠木門かぶきまで備えた立派な屋敷である。

ようやく長野一誠が遠くに長野家の冠木門を眺めるころ、長野家には屋前だというのに二百人を超える弔問客でにぎわっていた。記帳所には人が列をなし、その間を縫って婿養子の貞嘉が挨拶をして回っている。葬儀はまだ始まってはいないが、すでに僧侶の読経が低く響き、台所の竈からは煮炊きの煙が上り、女たちがいそがしく立ち働いている。そんな喧騒の中、弔問に来て一人の百姓が冠木門の前に立ち、新たにやってくる弔問客の品定めでもするかのように、南へ続く坂道をぼんやりと眺めていた。

その百姓はいぶかし気に坂道をじっと見ると、額に手庇

をかざし、そして叫んだ。

「おい、一大事じゃ、異人が来る、バケモンのような大きな馬に乗った異人が来るぞ。異人じゃ、異人じゃ」

その声を聞きつけて、大勢の弔問客が冠木門の前に集まってきた。

こんな草深い寒村に異人など来るわけがあるまい、振る舞い酒に酔った百姓が風に揺れる樹を異人とでも見間違えたにちがいない。誰もがそう思った。

やがて豆粒ほどであったその異人らしき姿が、徐々に大きくなってくると、人々はその姿が明らかに異形の人であることを明確に認識した。

巨大な茸毛の馬に跨った異人が、まっすぐ長野屋敷に向かってくる。

その馬は人々が見知っている貧弱な農耕馬より、人の頭ひとつ分背が高い。そして、そのしなやかな肢体は、元龜・天正の昔に侍大将を背に乗せ、戦場を疾風のように駆けた駿馬の如き風格を漂わせている。

ヨーロッパから輸入されたサラブレッド種の馬を初めて目にすれば、驚愕するのも当然であろう。

また乗り手の装いが異様である。

カシミヤの黒いモーニングコートに袖を通し、ウエストコートはシングルブレストの五つボタン、縦縞のコールズ

ボンに黒いブーツを履き、ウイングカラーのワイシャツに黒のシルクネクタイ、そして、頭上には黒のシルクハットを戴いている。

このまま英国王の前に進み出ても、少しも礼を失することはないような完璧な英国紳士の礼装である。しかし、この初めて見る異様ないで立ちが、英国紳士の礼装であることを長野村の人々が知る由もない。

「異人じゃ、異人じゃ、異人が近づいて来ておるぞ」

冠木門の前に集まった村人が騒ぎ立てる中、近づいて来る異人の姿がだんだんと大きく膨らんでくると、ある百姓が独り言のように言った。

「これはエグレス人に間違いない。錦絵のエグレス人と全く同じ姿じゃ、見てみる。頭の帽子の大きいこと、大きいこと……」

馬上の異人らしき男がなお近づいてくると、その姿が露わになった。馬上の男は身の丈五尺八寸を超え、口元に美髯を蓄えた堂々たる偉丈夫である。

すると、いつの間にか冠木門の前に立っていた喪主の貞嘉が、笑いながら言った。

「あん人は異人じゃない。儂らと同じ日本人じゃ。ようご覧なされ。久木野村の県議会議員、長野一誠先生じゃ」

長野一誠を見知っている百姓の一人が言った。

「ああ、間違いない、県議会議員の長野一誠先生じゃ。あんな大男は南阿蘇には長野一誠先生しかおらぬ」

やがて、長野一誠は馬に跨ったまま長野家の門前に近づいていった。

人々の騒ぐ声が聞こえるところまで来ると、その中から大きな声が響いた。

「なにが県議会の先生様だ。高利貸しの長野瀬平が錢で県議会議員の椅子をかうただけの話じゃろうが」

明治の御一新を期に、名を長野瀬平から今風に長野一誠と変えたこと、長野一誠が質屋を営んでいることを揶揄したのだ。

その声に一画からドツと歓声が上がった。

「どうやら、儂は歓迎されていないようだ……」

長野一誠は内心にががしく思った。しかし県議会議員として県政を主導しているという自負、県下屈指の大地主として多額の納税により国家に貢献しているという誇りが、一誠の堂々たる態度を崩させなかった。

門前で馬を降りた長野一誠が冠木門をくぐり抜けて母屋に近づくと、辺りは静まり返る。

並ぶ者ない巨軀、英国紳士そのままの豪奢な身なり、そして県議会で論客として盛名を馳せ、県下の名士として知らぬ者のない長野一誠の醸し出す威圧感に、誰もが目を伏

せ沈黙した。

長野一誠は思った。

「やはり、十年前のことを誰も忘れていないのだ。儂のことを誰も許しておらぬ。そして皆、儂を怖れている……」

やがて、葬儀も無事終わり帰途についた一誠は、馬の口取りをしている利助に話しかけた。

「利助、葬式に長野庄之助が来ておつたのに気が付いたか？」

利助が答えた。

「確かに庄之助が来ておりましたな。が、しかし、庄之助は故人の長野惟起翁と遠縁にあたる者で不思議ではありませぬ」

「いや、そのことではない。先の戦役からもう十年、誰も刀など箆筒の肥やしにしておるような時代に、庄之助は仕込み杖を持つておつた」

「はて？ それは気が付きませなんだが、そのような物騒な物を持つておりましたか？」

一誠は答えた。

「間違いない、あれは仕込み杖じゃ。それも先の戦役で幾人も人を斬つた刀じゃ。庄之助の刀は無銘ではあるが、刃渡り二尺六寸五分もある長寸の古刀と聞いている。仕込み杖に直してもその長さは隠せるものではない」

利助がいぶかし気に尋ねた。

「では、なんで仕込み杖など持ち出したのでござりましょうか？ 葬式で刀自慢をしても、誰も見向きもしますまいに……」

一誠は笑いながら言った。

「もしかしたら、儂を斬ろうとも思つたのかもしれない」

若年の頃より剣術修行を重ねてきた一誠は、殺気を肌で感じ取ることができる。

冠木門の手前で下馬しようとする一誠の眼に、人々に紛れて密かに仕込み杖の鯉口を切つた庄之助の姿が映つていた。

一誠に走り寄つた庄之助に、下段から逆袈裟に胴を斬り上げられ、落馬するところを返す刀で首を刎ねられている……。そんな自分の姿が一瞬脳裏を横切り、背筋に寒気が走つた。

「利助、十年たつても庄之助は少しも変わつておらぬな。もうすぐ四十に手が届くというのに、いつまでたつても血刀を振るつて暴れ回つた昔のままじゃ……」

帰途についた長野一誠の脳裏に、一連の出来事がまるで昨日のことのように浮かんでは消えていった。

ちようと十年前の明治十年のことである。前の年（明治九年）の不作で苦しんでいた南阿蘇の百姓に、災難が降りかかっていた。

明治新政府による税制の改革である。

徳川幕府を倒して明治と年号を改め、西洋列強に追いつき追い越せと力み返っているものの、政府の金庫は空っぽで、増税による解決法しか残されていなかった。新たに産業を興して税収を得るにしても、産業が育つまで待てない。要するに目先の金がないのだ。

政府は大増税に踏み切った。地租改正である。

それまで物納であった税を金納に変えた。それだけではなく、今まで取れ高に応じて納めていた税を、土地価格の三％と固定したのだ。かつて百姓は取れ高の何割かを税として支払い、残りは自由に処分することができた。これは今の所得税と同じで、収入額に対して課税される仕組みであり、非常に合理的であった。ところが、土地価格を基準として課税される場合、収入の多寡に関係なく定額を徴収され、不作の年は税金が払えなくなる。また、国税である地租に加え、地方税である「民費」も課されるようになった。

それまで非課税であった山林にも課税されるようになり、林業を生業とする百姓も困窮した。山林は植林して五十年

して初めて材木として出荷し、銭を得ることができるよう。植林して五十年間は一銭の銭も産まないにもかかわらず、税金だけは毎年支払わねばならない。

百姓の実情を無視し、徴税権を有する政府の立場のみ斟酌した片手落ちの課税のやり方であり、悪法と言うしかない。

また、百姓たちの共有財産とも言える入会地が、持ち主が特定できないという理由で国有地にされた例も出てきた。これは阿蘇の百姓にとっては死活問題であった。

阿蘇は他の地方と異なり、草原の面積が格段に広い。阿蘇の草原はモンゴルや中央アジアの草原のように自然に発生したものではない。縄文の昔から阿蘇の人々が春先に野焼きをして人工的に培った草原である。もし、野焼きをせずに自然にまかせておけば、十数年で林になり、三十年もすれば鬱蒼とした森へと変貌し、人も家畜も分け入ることができなくなる。

春の田植えが終わって暖かくなる頃、百姓たちは牧野と呼ばれる草原に牛を放つ。牛は青々と茂った滋養溢れる草を思う存分食み、冬の間はやせ細った体をまるまると太らせる。

真夏には冬のエサとなる刈干切をする。一家総出で草泊りと称するキャンプ生活をしながら牧野に泊まり込み、ひ

と冬の干し草を刈り取るのである。そんな命の草原を取り上げられれば、阿蘇の百姓たちの生活は破綻せざるを得ない。

この新政府の悪政に、全国の百姓が立ち上がったように、追い詰められた阿蘇の百姓たちも政府に牙をむいたのである。

この年、明治十年の二月は明治政府にとっては悪夢のような春の始まりであったが、南阿蘇の富裕層や村役人にとっても、激しい百姓一揆と、西郷隆盛率いる薩軍と政府軍との過酷な戦闘の狭間で翻弄され、眠れぬ夜を過ごすことになる。

長野一誠は龍王社での出来事を思い出し、指折り数えながら考えていた。

「二月の二十四日、二十五日、二十六日、二十七日、二十八日、そうじゃ、五日余り続いたのではなかつたらうか……」

最初は小さな集まりであった百姓たちの行動も、日ごとに大胆となり、小声でひそひそと話をしていたものが、わずか数日で巨大な渦となり、南阿蘇の村々を練り歩き、借金の下げ、年貢の引き下げ、郷備金の払い戻しなどを声高に要求し始めたのだった。郷備金とは百姓たちが万一に備えて先祖の時代から積み立ててきた金のことである。

そんななか、三月一日、河陰村龍王社で事件が起きた。川後田村と長野村の百姓二百数十人が、河陰村龍王社で氣勢を上げて騒いだのだ。

川後田村の今村徳治が百姓たちの前に立っている。今村徳治、そのときすでに四十の坂をとうに越えて、分別盛りの年であることに加え、温厚誠実な人柄は川後田村、長野村の百姓たちの絶大な信頼を得ている。三年三口と呼ばれた寡黙な今村徳治が、この日は別人のように饒舌に語った。

「今、農ら百姓は生きるか死ぬるか瀬戸際に立たされている。このままでは娘を二本木の女郎宿に売り、倅を熊本の商売人に丁稚奉公に出すだけでは済まぬ。牛も馬も馬喰にたたき売り、ご先祖様の墓石さえも石屋に売らねばならなくなる……：：：そうせねば地租の銭が払えないのじゃ」

徳治の声を聞いた一揆の百姓たちは皆黙り込んだ。

各々の心に明日からの生活の不安が覆いかぶさり、手足が萎えてくるのが分かる。

徳治はさらに声を張り上げた。

「川後田村、長野村の百姓衆に問う。ここまでくれば、あとは一揆を起こし、力で役人どもに強談判をするほかに道は無いと思うが、百姓衆の存念はどうじゃろうか？ お聞かせくださるまいか？」

集まった数百の百姓たちから怒濤のように、「おう、おう、

おう」と同意の声が上がる中、一人の老いた百姓が不安気に尋ねた。

「徳治、昔から百姓一揆はご法度、捕えられれば、音頭取りは斬首と決まっておる。もし本気で一揆を起こすのなら、首の座は誰が務められるのか聞いておきたいが……」

今村徳治が静かに口を開く。百姓たちは誰もその声を聞き漏らすまいと静まり返った。

「この今村徳治、一揆の旗を押し立て百姓衆の前を歩く上は、首の座をひと様にお任せするなど微塵も考えておらぬ。一揆の責めは儂一人で背負う覚悟でおるゆえ、思い切り暴れて、役人どもを震いあがらせてください」

今村徳治の覚悟を聞いた百姓たちは奮い立った。徳治がそこまで腹を括って一揆の旗を振っている。集まった百姓たちの意気は大いにあがり、松明が灯され真昼のように明るくなった境内に、武者押し声にも似た「エイ、トウ、エイ、トウ」、「イケ、イケ、オセ、オセ」という叫び声が響き渡る。百姓たちは足を踏み鳴らし、地面が揺れる。

やがて龍王社に百姓たちが集まっているのを聞き知った他村の百姓たちも次々に龍王社にやってきて、ついには総勢六百を超える人数に膨れあがった。

河陰村の龍王社は久木野村の長野一誠宅の眼と鼻の先にある。

百姓たちの騒ぐ声を聞きつけた長野一誠は思った。「これは、まずいことになった。時期が悪い、悪すぎる。なんでこんな時期に百姓たちは騒ぎ立てるのじゃ」

南阿蘇の戸長などの村役人には熊本鎮台からすでに知らせが届いている。西郷隆盛に率いられた薩摩勢が二月十五日に鹿児島を出発し、二月の二十日過ぎには熊本城、山鹿、高瀬で薩軍と政府軍の戦が始まっている。

「百姓一揆に加え、薩州勢と政府軍との戦が始まれば、この南阿蘇は収まりのつかない騒ぎになる。なんとか一揆を鎮めなくてはならない」

しかし、熊本城の鎮台兵も邏卒隊も薩州勢への対応に追われ、一揆の鎮圧まで手が回らない。

戊申の役で鬼神の如き働きを見せ、江戸幕府を打倒したばかりでなく、流す血がまだ足りないとはかりに餓狼のように東北諸藩に襲いかかり、奥羽の大地を血で染め上げた陸軍中将西郷隆盛が薩兵を率いているのだ。率いる薩兵は上方から東北まで連戦した歴戦の精兵で、血の滴る生首を肴に盃を傾けるような剽悍な薩摩兵児ばかりである。百姓あがりの鎮台兵はもちろん士族あがりの邏卒さえも震えあがり、明治新政府の高官たちは頭を抱えている。

長野一誠は不安に苛まれた。

「あの西郷隆盛が命知らずの薩兵一万三千余りを率いて

いるのであれば、新政府軍もかなりの苦戦となる。熊本城が抜かれ、玄界灘の北まで押し戻されるようなことが起こらぬとも限らぬ。そうなれば島津義弘、義久兄弟が率いる薩州勢にこの阿蘇一帯が蹂躪された天正十三年の悪夢が甦ってくる……」

熊本城下から大津街道を通り二重の峠を越えれば、眼下に阿蘇の田畑が望まれ、遠く目をやれば乙姫から米塚、杵島岳の麓へと続く大草原が広がる。熊本城下から二重の峠まで十里余り、戦に慣れた薩兵ならば一日で阿蘇まで進軍することができる。勢いに乗った薩軍はこの阿蘇まで攻め寄せて来る日も遠くはなからう。

長野一誠がどのようにして一揆の百姓たちを説得して思いとどまらせるか考えを巡らしているときに、ふいに一人の男が玄関の戸を叩いた。

「一誠さん、農じゃ、下田村の茂熊じゃ。開けてください」

戸を開けると下田村の荒巻茂熊が一人佇んでいる。荒巻茂熊は一誠と同じく地主であり、金貸しもするし、商店も持っている。もし、一揆勢に踏み込まれれば、打ちこわされ、財産を掠め取られ、ただではすまない立場である。

「これは良い所へ来なされた。さあ、お上がりなされ」

一誠は荒巻茂熊を招き入れた。茂熊がやってきた訳はお

およそ察しがついている。

「茂熊さん、すでにご存じの通り、百姓たちが騒いでおる。おのまま放っておけば、筵旗を押し立てて、役所や錢持ちの家の押しかけ、強訴、打ちこわしの暴挙に出るに違いあるまい。そうなれば、今まで波風ひとつ立たなかつたこの南阿蘇も大変なことになりますぞ」

茂熊が相槌を打って答えた。

「まさにそこじゃ。農が心配しているのは、この平穏な南阿蘇で騒動が起こることじゃ。百姓たちが打ちこわしを始めれば、錢持ち、地主どもが軒並み襲われ、借金証文は奪われ、米、家財道具一切合切掠め取られるのは必定じゃ。戸長や用掛などの村役人も吊るし上げられ、書類は焼かれて取り返しのつかぬことになる……」

一誠は腕を組んで考え込むように言った。

「茂熊さん、それだけでは済むまい。一揆になれば頭へ血が昇った百姓が乱暴狼藉せぬとも限らぬ。村役人を打ち擲し、地主や金貸しの家を引き倒し、火を放つかも知れぬ。そうなれば、一番先に狙われるのは、農やあんたじゃ。じゃが、農は錢を失うのを恐れておるのではない。失った錢はまた稼げば良いだけのこと」

茂熊が、さもあらんとばかりに頷いて言う。

「その通りじゃ、農も錢を失うことなど、気にかけてはお

らぬ。金は天下の回り物というではないか。銭をやつて一揆の百姓が大人しくなるのなら、蔵の銭すべて呉れてやつてもかまわぬ。それでこの南阿蘇の村々が平穩になるなら、安いものじゃ」

一誠が一呼吸おいて言った。

「心配なのは、一揆の後始末のことじゃ。儂の知る限り、百姓が勝ちを納めた一揆は今まで一度もありはしない。一か月や二か月は暴れて借金証文を破り捨て、打ちこわしで物を掠め取つても、必ず鎮圧され処罰される」

茂熊も相槌を打つ。

「その通りじゃ。鎮圧され処罰された百姓たちは前にも増して貧しくなる。それになあ……」

一誠が茂熊の心を見透かしたように言った。

「そうじゃ、儂の一番の心配事は、茂熊さんと同じじゃ。一揆で暴れた百姓を捕えるとき、まず、かつて村役人を務めた儂やあんたが、捕縛の兵なり邏卒なりを案内せねばならぬ。遠縁の者や顔見知りの者を捕えねばならぬなど、考えただけでも胸が潰れる思いじゃ……」

「その通りじゃ、それに、もしそんなことになれば、百姓は子々孫々まで遺恨を持ち、我らは代々恨まれて、この南阿蘇は二つに割れる。それが分かかっておるだけに頭が痛い……」

しばらく考え込んでいた長野一誠が口を開いた。

「茂熊さん、ここは儂とあんたで丸く収めるほか手はあるまい。どうじゃ、今から二人で龍王社へ出向いて、百姓たちを説得しようではないか！ 百姓のほとんどは鳥合の衆、頭分さえ納得させれば残りの者は大人しく引き下がるのではなからうか？」

話が決まると、二人は夜道を歩き龍王社へと急いだ。

龍王社の鳥居から覗くと、境内からあふれんばかりの百姓たちを前に、頭分らしき男が何事か話をしている。その男の横顔が松明の光に浮かんだのを見て、長野一誠も荒唐も内心安堵した。

龍王社の一揆の百姓を率いているのは川後田村の今村徳治、あの男が一揆の頭分なら話ができぬこともない。道理をわきまえ、知恵もあり、決して感情だけで動く男ではない。

一誠と茂熊は目をあわせると、まず一誠が声を上げた。

「儂は久木野村の長野一誠じゃ、こんな夜中に集まって何をさわいでおるのじゃ。こんなことしておると、熊本から邏卒が来て捕縛されるぞ。さっさと散って家へ帰つたらどうじゃ」

今村徳治と親しい荒巻茂熊が続けた。

「おい、徳治、お前はここで何をしている？ 見たところ

一揆の相談でもしておるようじゃが、政府に盾突くようなことをしてもろくなことはないぞ。何か役所に言いたいことがあれば、儂が代わって役所と話してもよい。ここは儂と一誠さんに任せて、今日のところは引き上げてはどうじゃ？」

一誠が前へ出ると、百姓たちは潮が引くように下がり、一誠ひとり光に照らされる。南阿蘇一番の分限者であり、里正、戸長などの村役人を歴任した名士の登場に、騒いでいた百姓たちも静まり返った。

一誠は静かに今村徳治に話しかけた。

「徳治、ここは儂と茂熊に任せんか？ 悪いようにはせん。儂ら三人で談合して百姓衆の身の立つように便宜を画るといふのはどうじゃ」

一誠の声に百姓たちはざわついた。皆ひそひそと相談している。

そこに、突然一人の男の影が浮かんだ。

「まずい、まずい男が現れよった。この場に一番いてほしくない男だ……」

一誠も茂熊もそう思った。

現れたのは長野村の百姓、長野庄之助。この男、よだれ犬の異名を持つ南阿蘇随一の乱暴者である。よだれ犬は狂犬病に罹って正気を失った犬のことである。正気を

失った狂犬病の犬は、誰彼かまわず噛みまくり危険極まりない。そんな厄介な男が現れたのだ。

背の高さは五尺三寸余り、当時の男としては普通だが、その岩のように押し固められた体の膂力はすさまじい。他の男たちがやつと一俵の米俵を背負って運ぶのに、庄之助は右と左の肩に一俵ずつ、合計二俵の米俵を担ぎ上げ楽々と運ぶ。二俵の米俵といえ、百二十キロの重さがあり、並みの男なら腰の骨が折れるほどの重量である。幼少の頃よりケンカが三度の飯より好きだという手のつけられない悪童だったが、長じてますます手に負えなくなった。やたら気が強く、相手が年上だろうと、何人いようと少しも恐れず暴れ回る。

あれは庄之助が十六の頃である。庄之助を懲らしめようと、隣の白川村の若い者が三人、木太刀を持って庄之助を囲んだことがある。

庄之助はただ一言「卑怯なり」と叫ぶと、目の前の一人を体落として地面に叩き付け、残り二人の木太刀を奪い取り踏み折ると、さんざん殴りつけ蹴り回した。三人の若い者は十日ばかり寝込んだが、カボチャのように腫れあがった顔を隠す手拭いは、ひと月余り取ることができなかったという。

そんなことがあって、その濃い眉毛の下のギョロリとし

た目玉に睨みつけられて黙らない男はいない。その庄之助が現れた以上、庄之助を懐柔しないことには話が先へ進まないことは分かり切っている。

一誠と茂熊は目配せすると、一誠がまず口を開いた。

「庄之助、良いところで会った。どうじゃ、農ら二人と徳治、庄之助の四人で談合せんか？ 農の家は眼と鼻の先じゃ、座敷で話をしようではないか」

茂熊も相槌を打ちながら言った。

「お互い知らぬ仲ではないであらう。一揆で騒げば、いつかは邏卒やら鎮台兵がやってきて面倒なことになる。農らも譲ることは譲る。村役人や県庁に言いたいことがあるれば、農らが替わりに陳情もしよう。村内で争うて、何の益があるうか。よく考えてみてくれ」

庄之助が困ったような顔で今村徳治を見ると、徳治が言った。

「お二方の言い分、よく解りました。庄之助、農は四人で談合するのも一策じゃと思うが、どうじゃ、お前も行かぬか？」

今村徳治に言われれば、否と言うわけにはいかない。庄之助がうなずくと、徳治は集まっている百姓たちに言った。

「お聞きの通りじゃ。農と庄之助で、今から一誠さんの家へ行って談合しようと思う。一揆を起こし騒ぎ立てるの

が我らの狙いではない。暮らしが立ち行くよう、役所に讓步させるのが肝要じゃ。どうじゃ、農らに任せてくれまいか。一誠さんも茂熊さんも悪いようにはせんと言われとる。今から、じっくりと談合してくるゆえ、今日のところはこれで解散して、おのおの家に帰ってもらえぬじゃろうか？」

己の首まで賭けて一揆の音頭取りを引き受けた今村徳治の言葉は重い。

誰もが口々に言った。

「徳治にすべてお任せする」

「徳治あつての農らじゃ、農らは今から女房子供のところへ戻ることにしましょうぞ」

百姓たちがすべて立ち去り、暗くなつた龍王社から一誠の自宅へ移つた四人が、座敷で向かい合つた。

まず、長野一誠が礼を言った。

「徳治、庄之助、無理を聞いてもらつた礼を言わせてもらおう。おかげで騒ぎも何とか収まり、集まつた百姓衆も皆家へ帰り安堵しておる」

茂熊は徳治と庄之助を見つめて言った。

「龍王社でも言つたように、悪いようにはせんつもりじゃ。お主らの望みは大方察しているが、腹藏なく存念を聞かせてもらえは重畳じゃ」

そこで今村徳治が初めて口を開いた。